

『何のために働くのか』を読んで

岡部憲和

僕は、五年前から、一人の職人を追っています。はさみ職人の岩田増太郎さんです。

「私は、十歳の頃、両親を亡くして、その頃から仕事をしていました。どうして働くのかも、何故その場にいるのかもわからなくて、ただやれと言われたことをやっていました。でも、作るのが嫌になったことはないですね。」

そう話す増太郎さんに対して、

「主人は、一つのことを極めたから、良いのだと思います。普通は、仕事をしていたら、誰だって苦勞を感じると思いますが、主人は、感じないと思います。あの人は、本当に作るのが楽しくて作っているんです。」
と、奥さんは、おっしゃいました。

僕は、自身の未来を重ね合わせたいという、強い衝動にかられました。

高校進学祝いに、僕は、父から、本を贈られました。北尾 吉孝さんの『何のために働くのか』。僕は、父が、なぜ、高校生になったばかりの自分に、この本を与えたのか、全くわかりませんでした。

しかし、読み終えた時、うれしさがこみ上げて来ました。何度も繰り返される、『真剣に』ということば。僕は、その重みを、初めてかみしめてみました。

そして、その果てに得たもの。それは、

「自分を高めるための時間を惜しみ、努力を厭っているようでは、結局、この世に何も残せはしません。それでは、人間として生まれてきたかいがない。」

「せっかく与えられた命です。なぜ自分に命が与えられたのか、その意味をぜひとも深く考えて生きたいと思うのです。」

著者の生き方は、まさしく、増太郎さんの生き方だったのです。

技で生き抜く、はさみ職人は、知で勝負する経営者と、生きる場は違っても、その魂が同じだったことに、僕は、大きな衝撃と共に、この上ない喜びを感じました。

今まで、僕は、出来たら、環境学者になりたいと考えて来ました。しかし、もう、そんな生半可な望みは捨てなければならないと気づきました。

僕は、絶対に、環境学者になると決めたのです。真剣に難題に挑戦し、真剣にもがき、そして、研究の成果を出し、世界を動かす。

僕は、この本に出会ったことで、環境の職人になる勇気を与えられたと思います。僕は、職人への階段を上り始めました。